



新郷中生34人絵本作り挑戦

村や自分を再発見

八戸大・短大総研が指導

新郷村の新郷中学校(遠藤美知子校長)の1、2年生34人が、村のことや自分・家族をテーマにした絵本を手作りし17日、須藤良美村長らに報告した。八戸大・短大総合研究所が県の委託事業として取り組む「地域力再生・創出資源調査分析」の一環で、生徒たちは

須藤村長らに絵本の説明をする生徒

絵本作りを通して村の魅力や自分自身を見つめ直した。同総研は年度内に一部を製本して村の主要施設に置く予定。

絵本作りは昨年12月まで4カ月がかりの作業となり、八戸短大の外崎充子、茂木典子両教授が同中の教員と共に指導に当たった。2年生16人は村の自然、歴史、イベントなどをテーマに計8冊を制

作。1年生18人は自分か家族を紹介する内容にし、1人1冊ずつ制作した。

生徒4人と遠藤校長、山沢三千穂教諭、同研究所の晴山一貫事務室長らが村役場を訪れ報告した。齋藤穂高君(2年)は小笠原功大君(同)と2人で、村が栽培に力を入れる「キノコ」の絵本を制作。齋藤君は「キノコは苦手なので、逆にキノコの良さを見つけて好きになろう」と思った。絵本を通して村内外の人に村の良さを知ってほしいと語った。小坂いのりさん(2年)は生キャラせんべい、飲むヨーグルト、ドラキュラアイスなど村の特産物を紹介。田沢青輝君(1年)と畠山渚さん(同)は自分の弟や妹のことを紹介した。須藤村長は「素晴らしい内容で、子どもも大人も村の良いところを知ることができ、村発展につながる」と生徒の頑張りをたたえていた。

(久保信行)